



仏暦2563年
2020年
令和2年
5月号

何となれば、前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す

(親鸞聖人・教行信証「安樂集・道緯禪師」のことば)

古くから、亡き人を悼み、慰めることを「お弔い」「おとむらい」と言います。以前から変わった言葉の響きだなあと感じていました。

そんな時、東京教区の報恩講が真宗会館で勤まり、いつも浄行寺でお話しをして下さる、海法隆先生の法話にその言葉が出てきたのです。

「弔う(とむらう)とは訪う(とぶらう)こと。」そう言われました。

「弔う」という言葉を辞書でひくと「遺族を見舞う」という意味がありました。つまり遺族の所へ行き、慰めの言葉や気持ちを表すということ。ひとつには、その場に足を運び、訪ねていき、悲しみを、その場で共有することに意味があるということでしょう。

もうひとつには、亡き人の人生や生涯、生きていた場所、暮らしを訪ね、「死」ということを縁にして、自分自身が生きている「今」に気付くということだと思えます。自分の「今」を問うことであり、文字通り自分自身の姿を「訪ねる」ことに他ならないのです。

その場に足を運んでわかることは、場所や空間や時間は隔たつていても私の「今」と決して無関係ではないことに気付くことも多いのです。

他人ごとではない、対岸の火事ではない……そんな思いがよぎるのです。東日本大震災で避難を余儀なくされた福島県の大葉町や富岡町の方々と、縁あつて出会いました。原発の悲劇は、決して東京に住む私と無関係ではなく、深くつながっていました。被害にあわれた方々を弔うことは、私の生き方を、ひとつひとつ訪ねていくことだと思わされたのです。

先立たれた方を弔うことは、残された私が、生きている姿を、今を、訪ねていくことなんだと教えられました。そついう心で永代経法要をお勤めしたいと思えます。

南無阿弥陀仏 釋 浄満

ゆるしてもらって生きていた私 (5月の法語・ほのほのカレンダー)

—2020年・令和2年 浄行寺—

永代経法要

「弔う」ことは「訪う」こと

とむらう

とぶらう

5月17日(日)

場所: 浄行寺本堂

午後1時
午後1時30分
午後2時30分

受付
法要開始
終了



開催時間を短縮して開催予定。午前の法要とご昼食接待は中止いたします。詳細は2頁。

お知らせ

新型コロナウイルスの感染状況に伴い、法要・行事中止はホームページでもお知らせします。

「大谷 浄行寺」と文字を入れて検索すると

「真宗大谷派慈光山浄行寺 一東京都世田谷区のお寺」というキーワードが出てきます。それをクリックしてください。是非ご覧ください。